

# 『双獣姦獄』

著：西野 花

ill：石田 要

「うん？ どうした、葵」

父は回収されたという『BEAST』が収容されているポッドの前で、端末に送られてくる生体データを綿密にチェックしていた。

「それが事故を起こしたという個体ですか」

葵は二つのポッドを、忌々しそうに眺める。ここからではどんな個体が収容されているのかは見えないが、今は意識レベルを落とされ、眠っている状態なのだろう。

「ああ、そうだ。まったく、取り扱いは慎重にしないとイケないのにな」

まるで責任を感じていないような父の言い方に、葵は思わず憤る。

「ユーザーに危害を加えたんですよ」

「危害とは人聞きが悪いな。持ち主が夢中になりすぎて勝手に身を持ち崩しただけだよ。酒と一緒に。過剰に摂取すれば身体に悪影響を及ぼす」

それを聞き、葵はますます嫌そうに眉根を寄せた。

「……タイプBEASTは危険です。処分すべきです」

「プレイロイドといえどもひとつの命だよ。機械ではない。意にそまぬといって処分するのはどうかね」

「他のタイプならともかく、BEASTの事故件数はすでに四件ですよ」

「どこの世界にも危険とスリルを求める者はいてな、こういった『事故物件』だと、むしろ試してみたいという輩が高額で求めてくる」

「我が社のイメージに傷がつきます！」

「——プレイロイドは蒼志の夢だよ。それを潰せというのかね」

父がふいに鋭い舌鋒で葵を突いてくる。その言葉に、思わず黙り込んでしまった。

——あの日、葵と蒼志は、互いの気持ちを知ってしまい、世間から隠れるように口づけを交わし合った。

蒼志が性処理用のプレイロイドの開発を始めたのは、それからだった。葵と同じように飛び級をしていた彼は、緋乃インダストリーに入社後、プロジェクトを組み、積極的な開発に携わることになる。

「——他に用がないのなら、出ていきなさい。研究の邪魔だ」

葵は結局何も言い返せないまま、ラボを追い出されてしまった。

その夜、研究員が全員帰ったのを勤務管理の端末で確かめた後、葵はラボに忍び込んだ。いつも最後に退出する父の姿もない。

葵は調整ポッドに入った二体のプレイロイドに近づくと、特殊樹脂に覆われたケースの上から覗き込んだ。実際にまじまじと見るのは初めてだった。

ポッドの中で、裸のB E A S Tが目を閉じている。バイタルを管理している機械が、ピッピッと小さな電子音を立てていた。

右側のポッドには、三十代前半くらいの外見の男が横たわっていた。均整のとれた、逞しい肉体を持っている。意志の強そうな眉と、彫りの深い顔立ち。やや長めの髪は、まるで肉食獣のたてがみを思わせた。左腕に『B-01』という個体ナンバーが刻印されていた。

左側のポッドにいたのは、葵と同じくらいの年頃に見える男だ。こちらは顔立ちがずいぶん甘く、女性が熱狂しそうなアイドルスターのような容姿をしている。右側の個体よりはやや細身だが、鞭のようにしなやかな筋肉を持つ身体つきだった。こちらは腰骨のあたりに『B-02』と入れられていた。

——これがB E A S T.....。

今回事故を起こしたユーザーは女性だと聞いたが、彼らは男でも女でも抱くそうだ。それとは逆に抱かれるためのプレイロイドも存在し、そちらは現在調整開発中と聞いている。

(兄さんはどうして、こんなものを熱心に開発していたんだろう)

蒼志は父と似ていて、研究職に向いていた人間だった。緋乃インダストリーに入ってからというもの、研究に没頭し、葵と過ごす時間も少なくなっていた。

(——こんなものに)

そんなふうを考えて、葵は目を閉じた。自社のイメージだなんだとってはいるが、自分から兄を奪ったプレイロイドに、葵は嫉妬していたのかもしれない。まるで浅はかな女のように思った。自己嫌悪に、唇を噛む。

プレイロイドにも、人格や感情があるという。だとしたら、こんなふうに人間に管理され、束縛されてどのように思っているのだろう。

これまで考えてもみなかった想いに囚われて、葵はそっと手を伸ばし、ポッドの表面に掌を置いた。

「——指紋認証、確認」

突然合成音声が流れて、ポッドの上部についたランプが灯る。驚いた葵は、一步退き、背後にあったもうひとつのポッドに手をついてしまった。

「——指紋認証、確認」

こちらにも続けて音声が流れ、同じようにランプが灯る。

「——な.....？」

何が起きているのか、葵にはわからなかった。

「タイプB E A S T、B-01及びB-02、覚醒開始」

ポッドの側面についているコンソールが、自動操作とおぼしき点滅を繰り返した。

(まさか——目を覚ます!?)

プレイロイドは凍結されている。それはこんなふうに、少し触ってしまったからといって動き出すものではない。いくつものシーケンスを重ねて覚醒するものだ。

そうこうしているうちに、ポッドの蓋が開く。眠っていたB E A S Tがゆっくりと目を開け、そして起き上がった。

「あ——」

彼らは緑色の瞳をしている。その目が、四つとも葵を捉えた。二体——いや、二人のB E A S Tがポッドを出て床に降り立ち、葵に向き直る。

「初めまして、新しいマスター」

二人の獣が笑う。葵の意識は、そこで途切れた。

[#改ページ]

「——俺達、どうして兄弟に生まれてしまったんだろう」

蒼志の腕の中で、葵はぽつりと呟いた。

「俺が兄貴じゃ嫌？」

「そうじゃなくて！」

葵は顔を上げ、そうして次に蒼志の胸に再び顔を埋めた。

「だって、いけないことなのに——兄さんを好きになったら、いけないのに」

誰かに知られたら、引き離されてしまうかもしれない。そう訴えると、蒼志は葵の髪を優しく撫でた。

「そうかもしれないね」

「父さんだって、知ったら怒るよ」

「うん」

怒るかもな、と彼は言った。兄はどうして、そんなに落ち着いているのだろう。

「でも俺は、怒られてもいいと思っている」

「え？」

「誰かに知られて引き離されそうになったら、俺はお前を連れて逃げるよ」

「.....兄さん」

「それとも、葵は俺と来るのは嫌か？」

「——嫌じゃない！」

葵が蒼志の首に縋りつくと、彼はきつく抱き締めてきた。

「世界がなんて言ったって、俺は葵を離すつもりはないよ。.....たとえ、葵が嫌だって言っても」

その時の気持ちをなんていったらいいのだろう。たとえこの先、ひとつもいいことがなくなっても、その時の嬉しい気持ちだけで生きていけると思った。

兄が側にいてくれるのなら。

「うん——ずっと離さないでいて欲しい」

たとえ何があっても。

人目を忍び睦み合いながら、葵は兄の腕の中で目を閉じた。

[#改ページ]

兄の夢を見た後は、見慣れた寢室の天井が目に入る。それがいつものことだった。

「……………」

違う。この天井は、俺の部屋じゃない。

葵の寢室はもっと無機質で、そっけない白い天井だ。それなのに今、目に入っている部屋は、優しい木目の天井と壁になっている。

いったいここはどこだ——。いや、そもそも、何があった？

葵はどうにかして記憶を探ろうとした。確か、深夜にラボに入って、B E A S Tを見て、それから——。

その時、ふいに部屋のドアが開いたので、葵は驚いて起き上がった。

「あ、気がついた？」

人懐っこい青年がにこにこ笑いながら部屋に入ってくる。その姿を見て、葵は思わず息を呑んだ。B E A S Tだ。あの時、ラボで凍結されていたはずの——。

「初めまして、よろしくマスター。俺はタイプB E A S T B-02。個体名は薫。これからよろしくね」

「これから…って」

その時、葵はすべてを思い出した。そうだ。あの時、ポッドに触れただけで勝手にB E A S Tが覚醒し、彼らが起きたところで意識を失った。

「ここはどこだ。いったい、俺に何をした」

葵はスーツの上着を脱がされ、ネクタイを外されて寝かされていた。シャツの首元が緩められている。

「それに……、マスターだと？ 俺はお前達の主人になったつもりはない」

「それについては、俺から説明する」

部屋にもう一人のB E A S Tが入ってきた。あの時、右側のポッドに入っていた奴だ。

「俺はB-01。個体名は天牙だ」

天牙と名乗ったB E A S Tは葵を見下ろすように見つめる。二人とも、どこから調達したのか衣服を着用していた。薫は今時の若者が好むようなラフなデニムとパーカーで、天牙のほうはレザーのボトムにブーツ、それと黒いシャツを身につけていた。

「俺達には開発者である緋乃邦彦博士から最優先コマンドが与えられている。緋乃葵をマスターとし、ここにとどめ、性交を繰り返せと」

「な……に？」

一瞬、言葉の意味がよくわからなかった。

父が何故、そんな命令を与えるのか。

「なんでも、マスターは俺達のことよく知らないから、仲良くしてこいってことみたい」

薫が葵の座るベッドに両肘をつき、にやにやと笑いかけてくる。恐ろしく人間くさい表情だった。彼らは本当に、つくりものなのか。

「——ふざけるな！ そんな命令聞けるか！ マスターなんて呼ぶな！」

葵はベッドから飛び下り、部屋を出ようとした。

ありえない。ここがどこかは知らないが、こんなところにいる筋合いはない。帰って父に問いただしてやる。いったいこれはなんの茶番なのかと。

だが、葵の手がドアにかかる寸前で、天牙に腕を捕らえられる。彼はいとも簡単に葵をドアに押しつけ、獣のような犬歯を見せてにやりと笑った。

「マスターと呼ばれるのが嫌なら、名前で呼ぼうか、葵」

「——...っ、離.....っ！」

彼の力は想像以上で、まったく歯が立たなかった。B E A S Tの運動性能は、人間以上なのか。

B E A S Tには感情と自立した意思があるという。それもまた彼らが『危険』とされる理由だった。葵は本能的な恐怖が襲ってくるのを感じた。けれど、それとともに、何か覚えのある衝動が湧き上がってくる。

(なんだ？ こんな——ありえない)

葵はその衝動を知っていた。それは、興奮という。

これは彼らがやっていることなのだろうか。B E A S Tには、人間を発情させる能力があると？ それとも、これは、葵自身の。

(ちがうちがう——俺じゃない。これは、こいつらの)

「そら」

「あっ！」

天牙が葵をベッドのほうに軽く放ると、そこにいた薫に抱き留められた。

「捕まえた」

薫の膂力も、天牙と同じように強い。葵はなす術もなくさっきまで横たわっていたベッドに押さえつけられた。

「綺麗だね、葵は——。それに、すごく可愛い」

「やめろっ！」

衣服を器用に脱がされる行為に抗いながら、葵は強く拒絶した。十四の時に心無い暴力に遭ってから、葵は他人と触れ合うことを拒絶して生きてきた。触れていいのは兄だけだった。冷たく取り澄まし、社内では陰で「氷の花」などと呼ばれていることも知っている。

そんな葵を可愛いなどと言う者は、もうこの世にはいない。

「無駄だ。お前はちゃんと男を欲しがっている。俺達にはそれがわかる」

天牙まで加わってしまうと、葵は更に追いつめられた。あっという間に裸に剥かれ、無防備に転がされる。裸にされた心許なさと、羞恥が葵を襲った。

「い、——んっ！」

嫌だ、という途中で、天牙に口を塞がれる。歯列を割って強引に侵入してきた舌は熱く、ヒトのものとなんら変わりなかった。その舌が敏感な口内を、ねっとり舐め回してくる。

「ふ、あ——、んう」

その見かけに反して、天牙の舌の動きは繊細だった。舌の裏をちろちろと舐められると、腰のあたりがぞくぞくする。そうしてちゅるっと舌を捕らえられ、強く弱く吸われてしまうと、頭の中に白く靄がかかった。

「んっ……は」

ようやく口づけから解放された時には、葵の頬は上気し、目元がうっすらと朱く染まっていた。互いの舌が唾液の糸で繋がっている。

「俺達の体液って、人間には媚薬みたいな作用があるらしいんだよね。もうたまんなくなってるだろ？——ほら、俺ともキスして？」

「んっ、アっ…んっ」

今度は薫に顎を捕らえられ、また深く口づけられた。舌根を痛いほどに吸われると、腰の奥がきゅうっ、と引き攣れるように疼く。

「ん…あっ」

薫に口を吸われている最中に、天牙は舌を耳の中に挿れてきた。ちゅくちゅくと耳の中を犯されて、背筋にはっきりとした快感が走る。あまりに昂ぶってしまって、目尻に涙が滲んだ。

「もう涙を浮かべて……。敏感だな」

「こんなんで俺達に抱かれて大丈夫かな。いきなり壊さないようにしないと」

うなじをちろちろと舐め、薫がくすくすと笑いながら言う。その言葉に、恍惚となりかかっていた葵の頭に急に恐怖が走った。

「い、嫌だっ……。壊れたく、ないっ」

「大丈夫だ。お前なら、俺達にどこまでも付き合うことができる」

「そうそう」

それはいったいどういう意味なのか。自分がどこまでも卑猥な存在だと言われているようにも思えて、葵は唇を噛んだ。

「これから、股が乾く間もないほどにたっぷりと感じさせてやる——。楽しみにしている」

天牙のあまりに卑猥な煽りに、葵はただ身を震わせるしかなかった。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>